

メッセージアウトライン 創世記4:1～16「カインとアベル」

[1-2]「人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、『私は、主によってひとりの男子を得た』と言った。彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは、土を耕す者となった」

最初の人間アダムとエバはカインとアベルを産んだ。カインが兄でアベルが弟。カインは「私は得た」の意。アベルは「息、蒸気」の意で象徴的には「むなしさ」を意味する。アベルは羊を飼う者、カインは土を耕す者となった。

[3-5]「ある時期になって、カインは地の作物から主へのささげ物を持って来たが、アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。主はアベルとそのささげ物とに目を留められた」

「ある時期になって」…彼らが青年、あるいは大人になってからであろう。その場所はおそらく、いのちの木への道を守るためにケルビムを置かれたエデンの園の入り口近くであったのではないか。

二人とも神にささげ物を持って来た。しかし、カインには神に対する熱心さ、心からの感謝の思いではなく、義務的で最低限の神との関係を維持するためであったのではないだろうか。これに対して弟のアベルは、神に対する心からの感謝の思いから羊の初子の中から、最上のものを持って来てささげた。→ヘブル11:4 主はアベルとそのささげ物に目を留められたが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それでカインはひどく怒り、顔を伏せた。

[6-7]「そこで、主は、カインに仰せられた。『なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。』」

7節は聖書の中で初めて「罪」ということばが出て来る箇所。罪が獐猛な猛獣のように待ち伏せして、襲いかかろうとしていることのたとえである。「だが、あなたは、それを治めるべきである」これは憤りに身を任せて、それに引きずり回されるようになるのではなく、それを治めなければならないとの警告である。このようにして神はカインに悔い改めの機会を与えておられるのである。自己中心な考えや行動ではなく、悔い改めて正しい行いをする。神に立ち返り、神のみことばに従い、神のみこころにかなった生き方をすることが求められている。

[8]「しかし、カインは弟アベルに話しかけた。『野に行こうではないか。』そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した」

カインは神のことばに聞き従わず、弟をねたみ、憎み、野に連れ出して殺してしまった。人間の罪の破壊的な力がここにはっきりと現れている。

[9]「主はカインに、『あなたの弟アベルは、どこにいるのか』と問われた。カインは答えた。『知りません。私は、自分の弟の番人なのではないですか。』」

主なる神の、「あなたの弟アベルはどこにいるのか」との問いかけにカインは「知りません…」とうそをつく。アダムが罪を犯し、神がアダムを捜された時、彼はその罪を認め、恐れつつ神に答えた。→3:10 しかし、カインはうそをついて言い逃れようとする。そのため神は彼にあわれみをもって語ることはせず、ただちにさばきのことばを告げられる。

[10]「あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる」…これは復讐の叫びであろう。→黙示録6:9-10

[11-12]「今や、あなたはその土地にのろわれている。その土地は口を開いてあなたの手から、あなたの弟の血を受けた。それで、あなたがその土地を耕しても、土地はもはや、あなたのためにその力を生じない。あなたは地上をさまよい歩くさすらい人となるのだ」

アベルの血を受けたその土地はのろわれたものとなり、耕してももはや実りを見ることがない。これは人間の罪の結果が、実際にその地に悪い影響を及ぼすようになるということである。そして、神は彼を「地上をさまよい歩くさすらい人となるのだ」と宣言された。これは神の御顔を避け、次から次へと住む場所を変えなければならぬという放浪の姿である。

[13-14]「カインは主に申し上げた。『私の咎は、大きすぎて、にないきれません。ああ、あなたはきょう私をこの土地から追い出されたので、私はあなたの御顔から隠れ、地上をさまよい歩くさすらい人とならなければなりません。それで、私に出会う者はだれでも、私を殺すでしょう。』」

「私の咎は、大きすぎて、にないきれません。」…カインはここで罪の赦しを願っているのではなく、自分の受ける刑罰の大きさについて不満の声を上げているのである。どこへ隠れても神の御顔を避けることができないので、彼は地上をさまよい歩き続けなければならない。神から逃走しようとする人間の絶望的な姿である。

「わたしに出会う者」とはもちろんアダムとエバから生まれた者、また、これから生まれて来る者のことを指す。創世記5:1～5にはアダムは九百三十年生きて息子や娘たちを生んだと書かれている。今日と違って理想的な地球環境の中で、人は長生きでき、したがって子どもを生める期間も長期にわたり、たくさんの子どもたちが生まれたことであろう。

[15-16]「主は彼に仰せられた。『それだから、だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける。』そこで主は、彼に出会う者が、だれも彼を殺すことのないように、カインに一つのしるしを下さった。それで、カインは、主の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた」

主はこのような悔い改めない罪人であるカインの訴えにもあわれみを惜しまれない。「それだから、だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける」。「七」は完全数を現すので、神の復讐は完全であるという意味。「一つのしるし」とはどのようなものか不明。

これは神を離れたすべての人間に対してとられる神の態度である。神はすべての人が滅びるのを望まれず、悔い改めてご自身に立ち返ってくるのを待っておられる。→Ⅱペテロ3:9

しかし、それでも最後まで悔い改めない者には容赦のない神のさばきと永遠の滅びが待っている。 当時は人間に悪影響を与えるようなものがない理想的な生活環境であったが、カインはアベルを殺した。つまり人間の罪は内側にあってそれが悪を行わせる。この罪の問題を解決するためにはどうすればよいか。それは人にはできない。しかし神がそのような私たちをあわれんでくださり救いの道を用意して下さった。それが聖書全体を通して流れている神の救いのご計画である。→創世記3:15、ヨハネ3:16、Ⅰヨハネ1:9～10